東孫里見八犬傳 十一

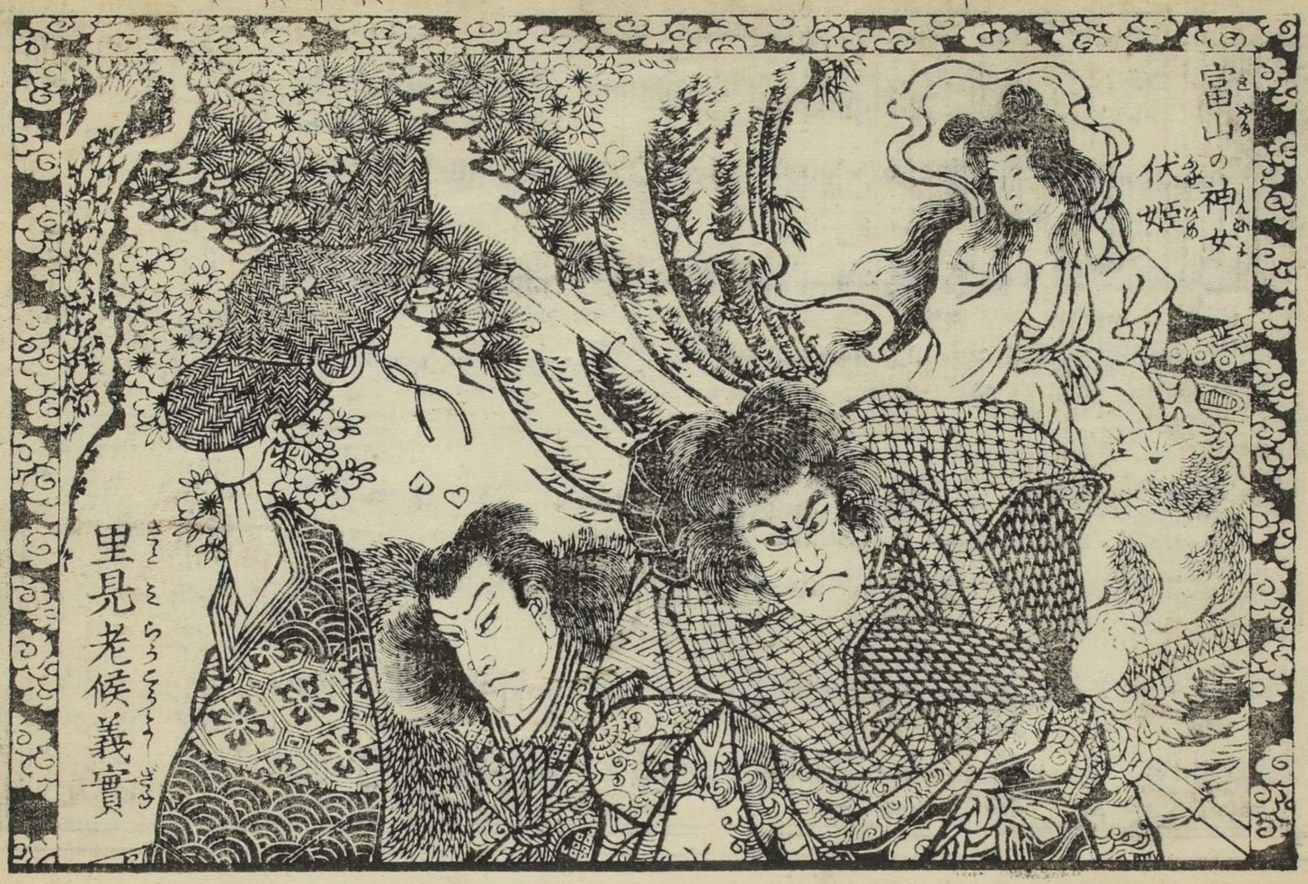
へ13
3704
11

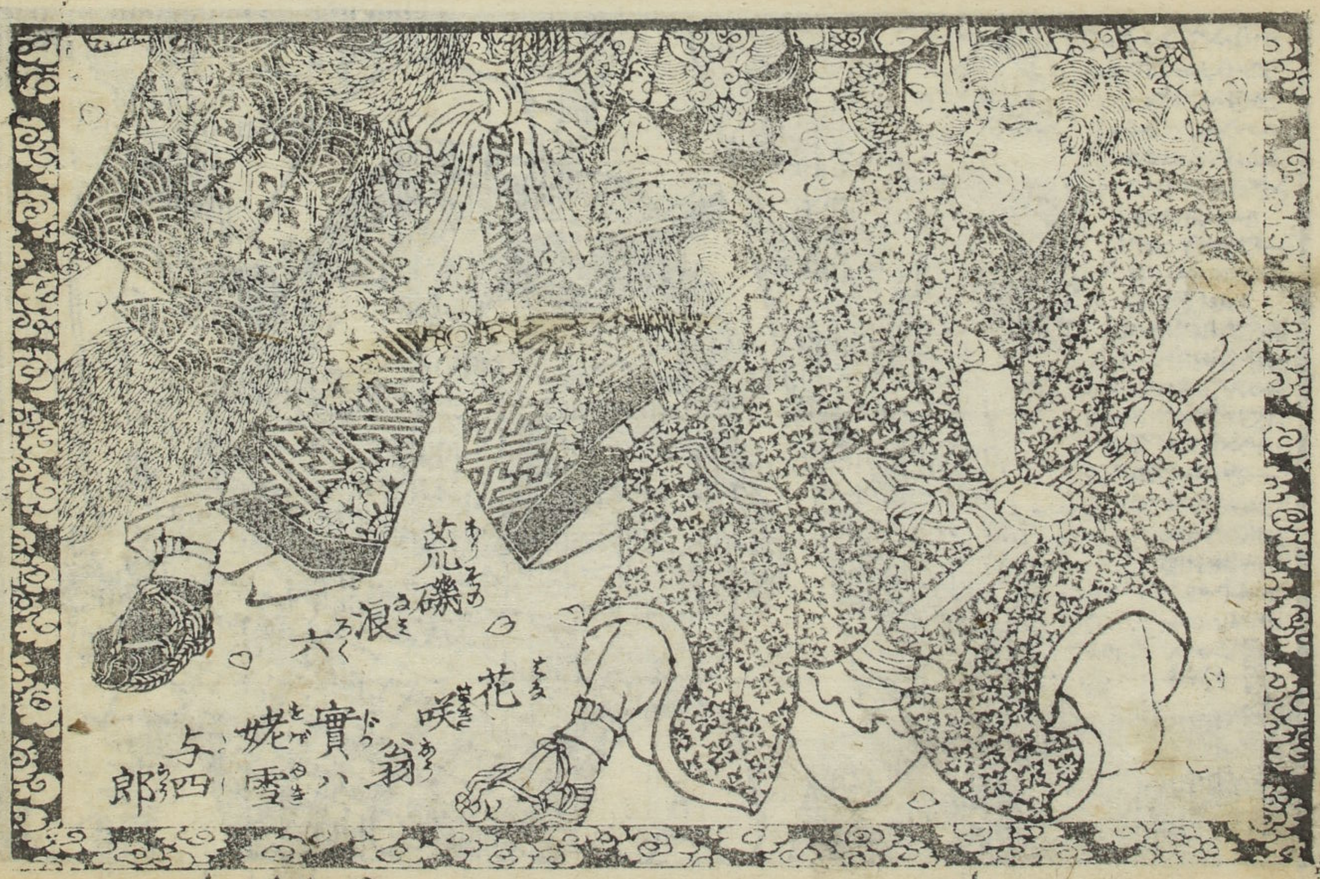
門へ13
號3704
巻11

前の録者琴童子ぶ既ゆ廿七編の序文ふり誌せる如く原本等九十二回より九十五回ふうち續き軍談で謂修羅場のミ媚を婦幼ふこらまく欲ち繪様のなれふ困果れど元來他作の抄録物自在を得ること難しめ迄バ攻伐戰闘を短く端折て其槩略を

筆記ふ。此次三十編以下ハ未發の大江ぶ富山の出身素藤退治の間ゆハ妙椿比丘尼の艶麗化姿濱路姫の嬋娟ふ繪組の工風もはし幾ぶ毫を揮て御覧ふ入迄バ暫時辛抱ゆさせぬと序文ゆ老實ふ述ること志さう

假名垣魯文記


富山の神女
伏姫
里見老侯義實


荒磯
浪
六
花
咲
我
實
ハ
姥雪
与四郎

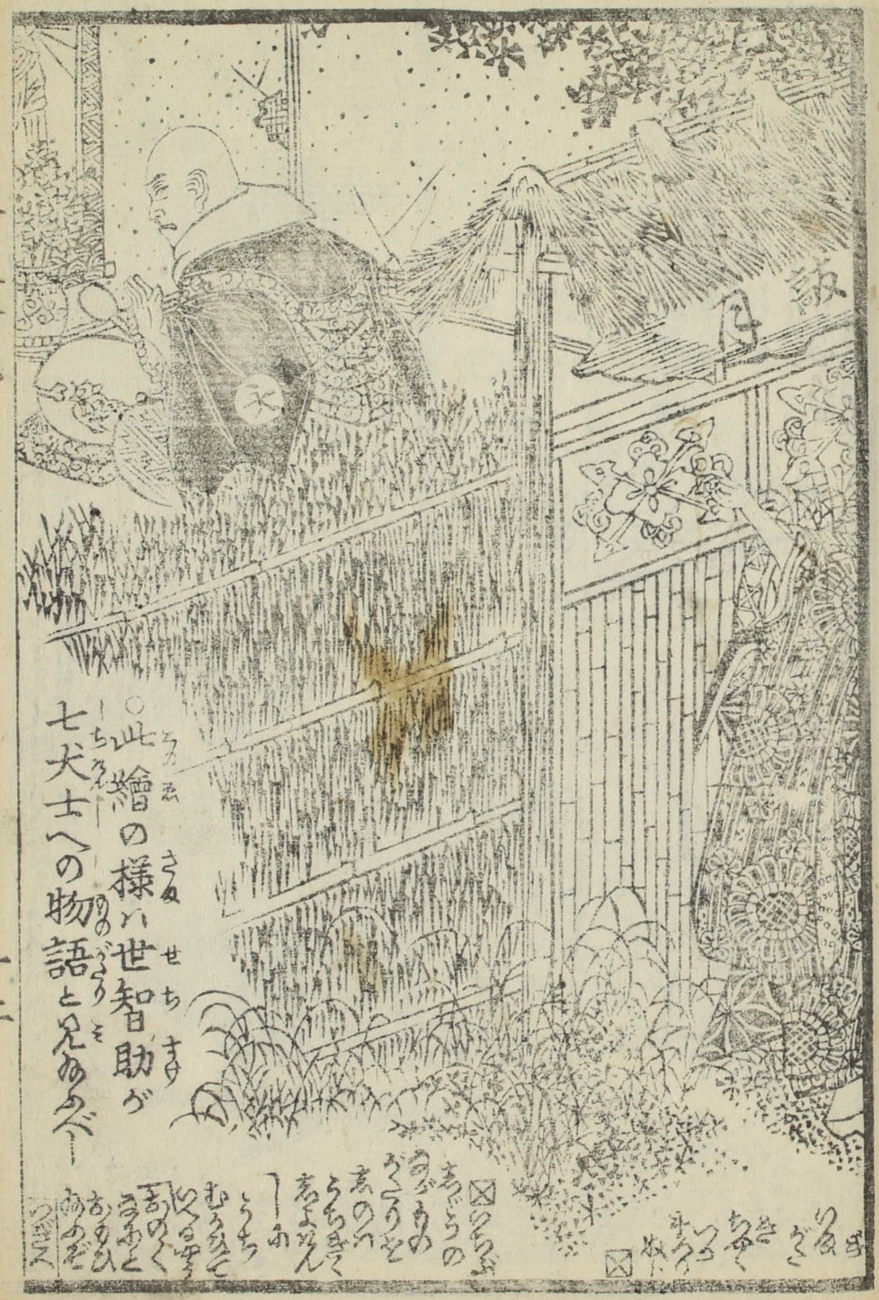
森羅殿

○此丸の繪様は
氷垣氏大士
等を鄉食應
の投ゐを勝
手ゐ調理の
やトちゃ

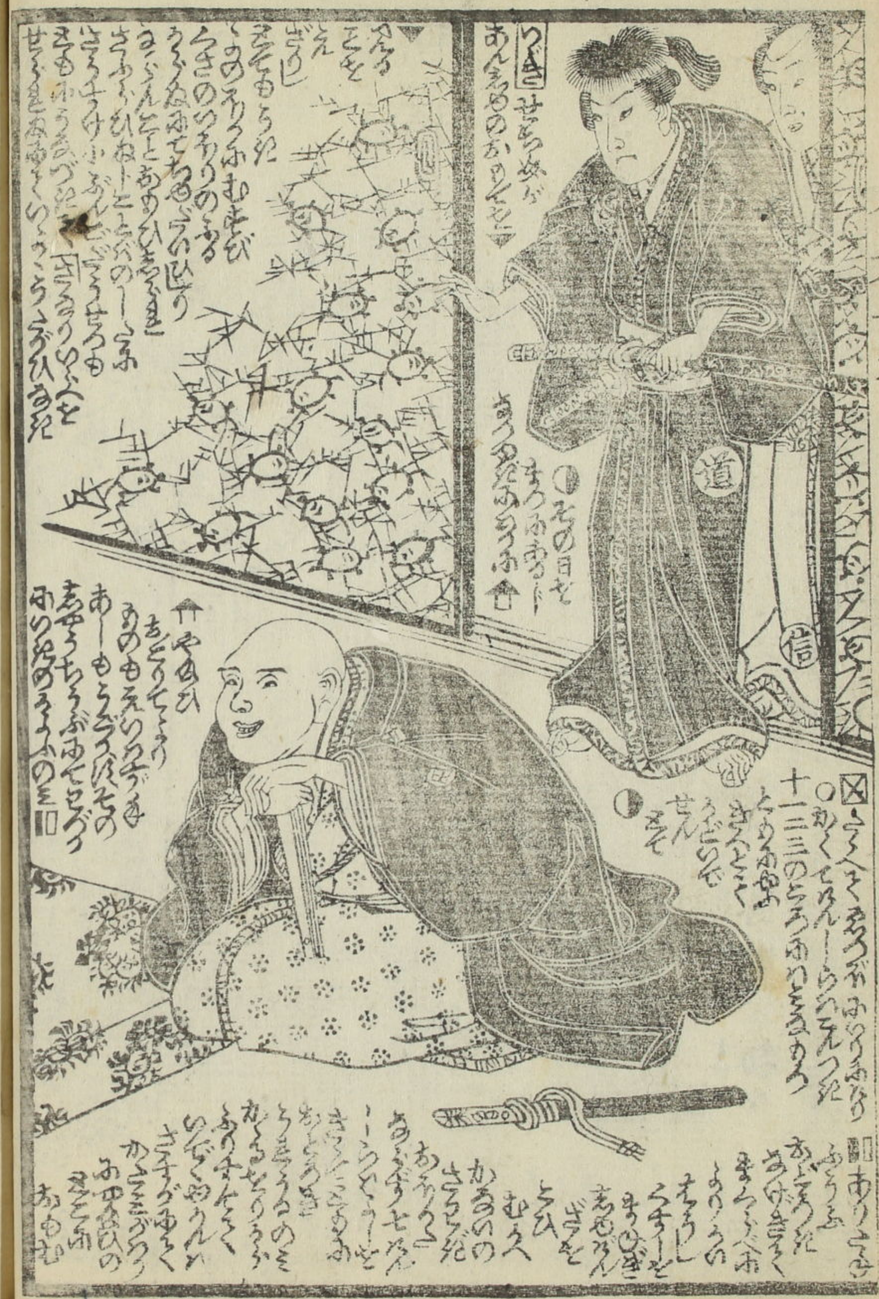
○世智助小才二の二人伊皿子と怒グ岡の城内（しろうち）を敵の動静を

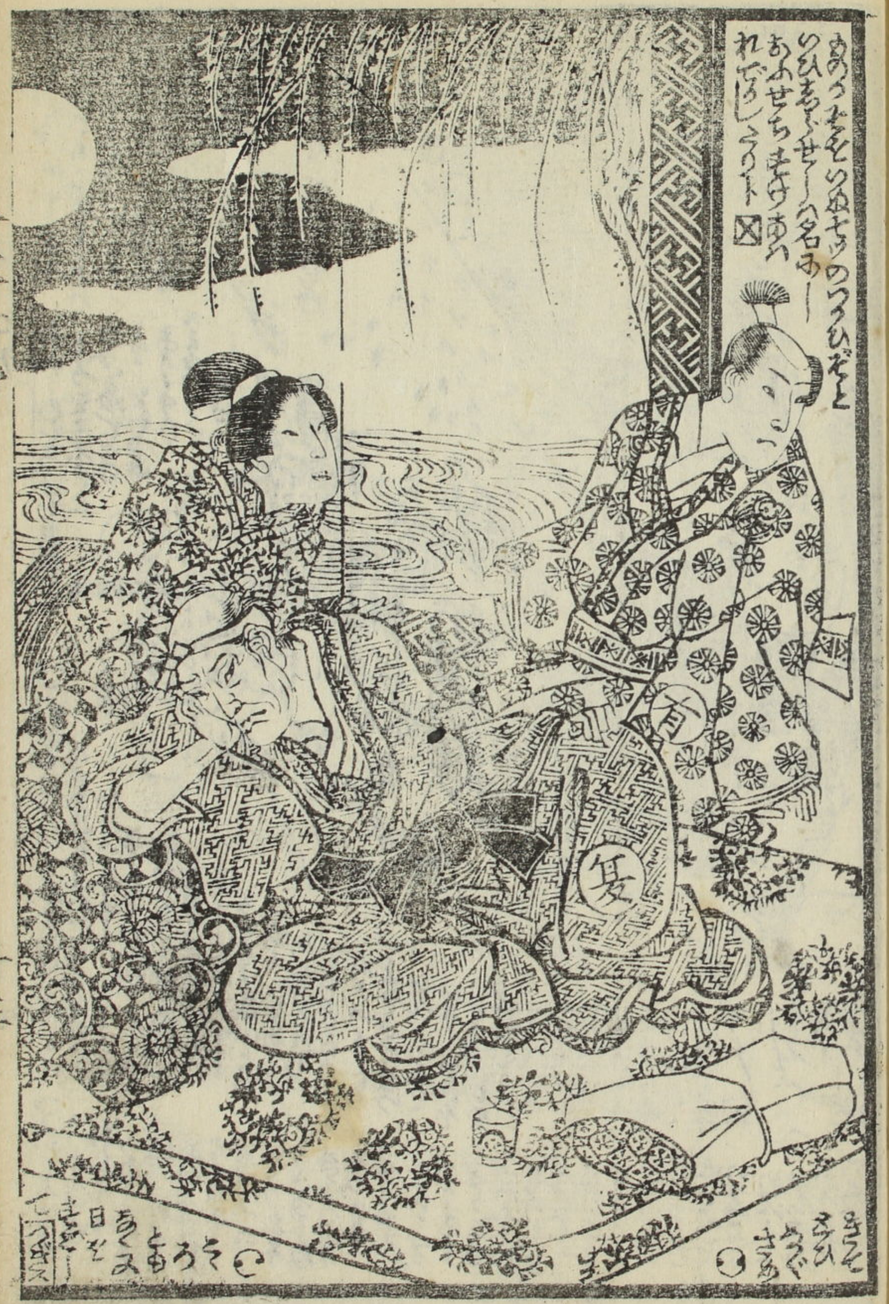
魯文録
芳幾画
蓮の
三の巻

三の巻



○此繪の様ハ世智助が七犬士への物語とそなへべし

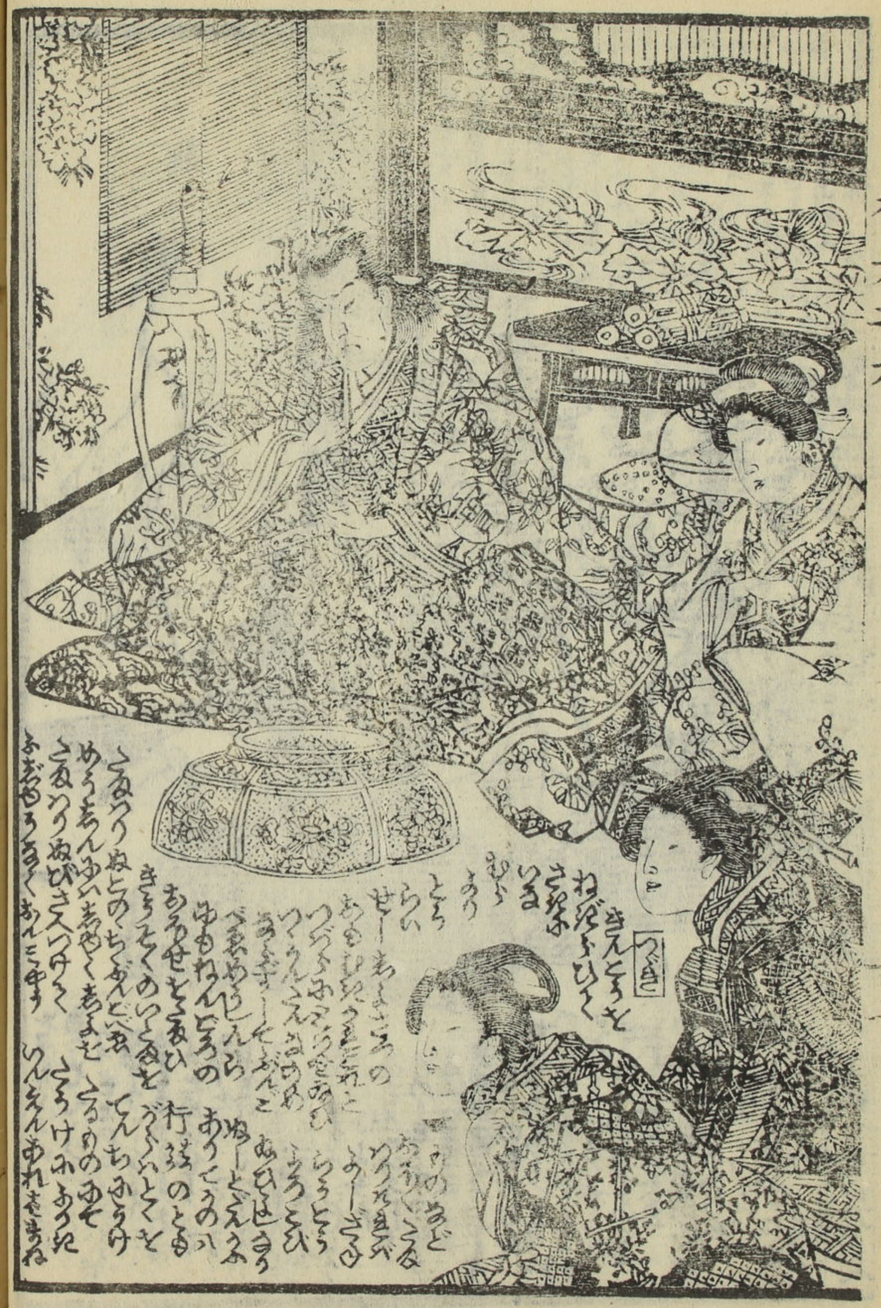

道
信


夏

三の巻へ
○安房国
稲村城之図
従是東南里見領
文明十年八月

照

東


つき
きんとうを
ねぶりよりひく
さるがいる

○此席末ハ
ゼヒヘバ
文五兵衛
妙真
も
居べきを
奥まれば
省き

假名垣抄録

大星氏寺岡ふ對ゝて曰其元ハ足輕でハあるまい。大きゐ口輕者。ナント
牽頭持ゐさゝれぬゝト云云僕去る嘉永の季歳毫採[初]代記。

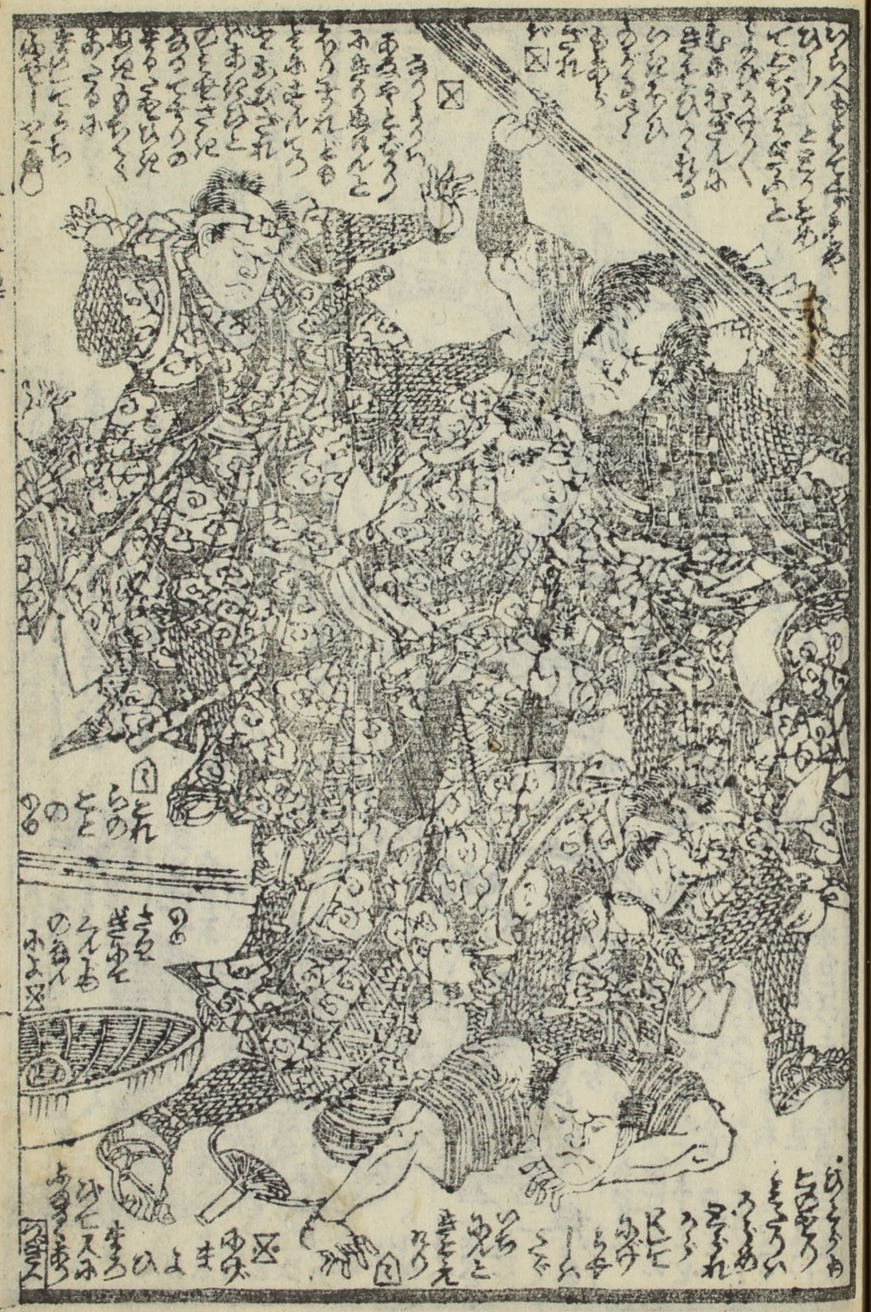
抄録物ゝう登庸ゐ足輕ゐゝで口徑ふ。漫題ゐ筆頭幇間。
太郎次郎の犬の皮太鼓小張ゐ鈍作の餘業ふ録ゐ八犬傳ゐ昔
採ゐる杵屋ゐ三弦他人の作意を中途ゐふ。編次ゐ[ま]ゐる苦心ハ
一ツゐ。勿体ゐくゐ。ゐゐめゐ。抄録物の哀ゐふ一帙上下の潤筆ゐ
鉢ゐ坊主の報謝米。惜ゐ口ふ風ゐゐ。ゐゐゐゐゐ迷惑ゐ九大夫ゐ。歌の犬
ゐ因ふゐ我別号の假名手本義士ゐ矢士の鄉音ふ。ゐん　魚文記

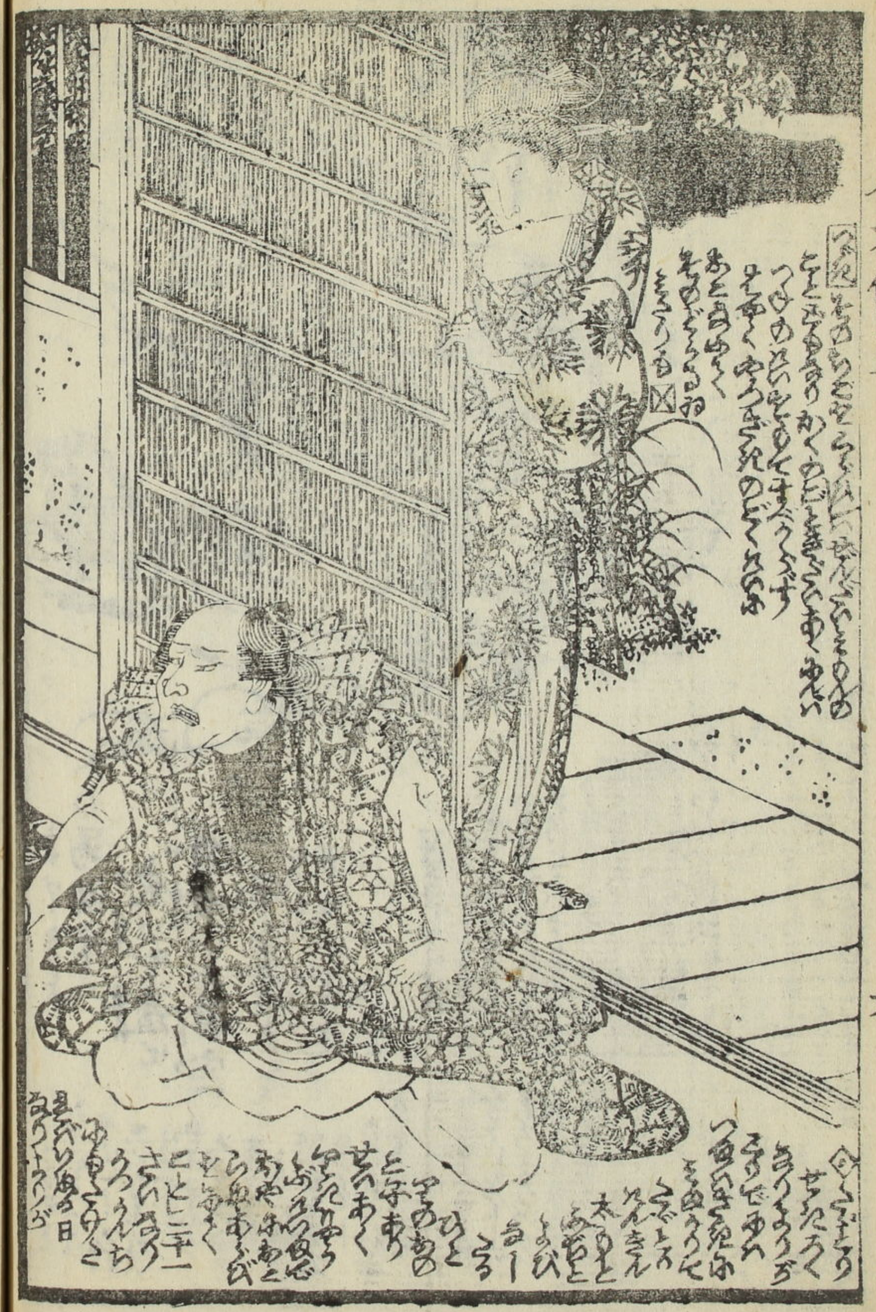
濱路姫

平田張盆作

里見義成

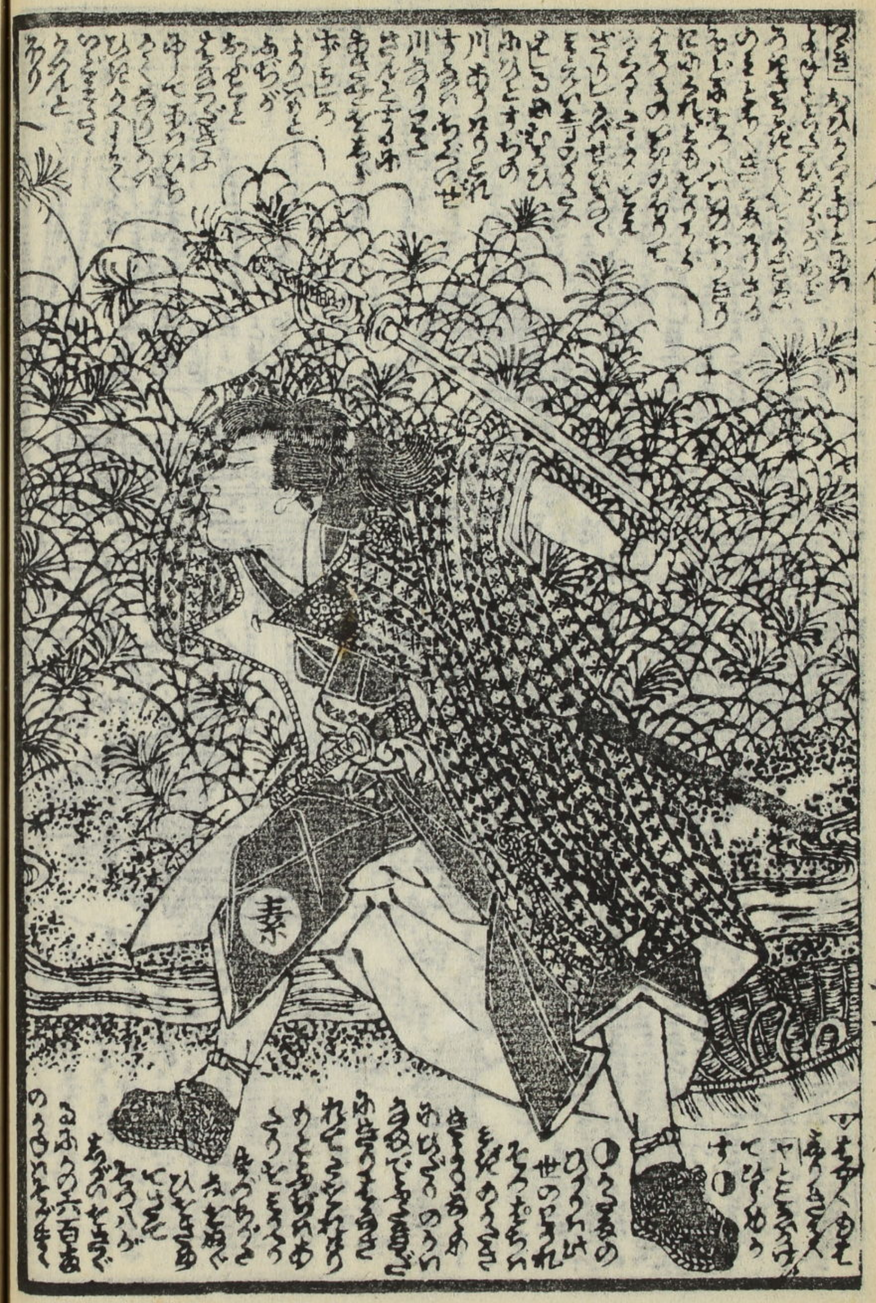
○傘鉾の綾の小路室町西へ入る町より出る





魯文作
芳幾画

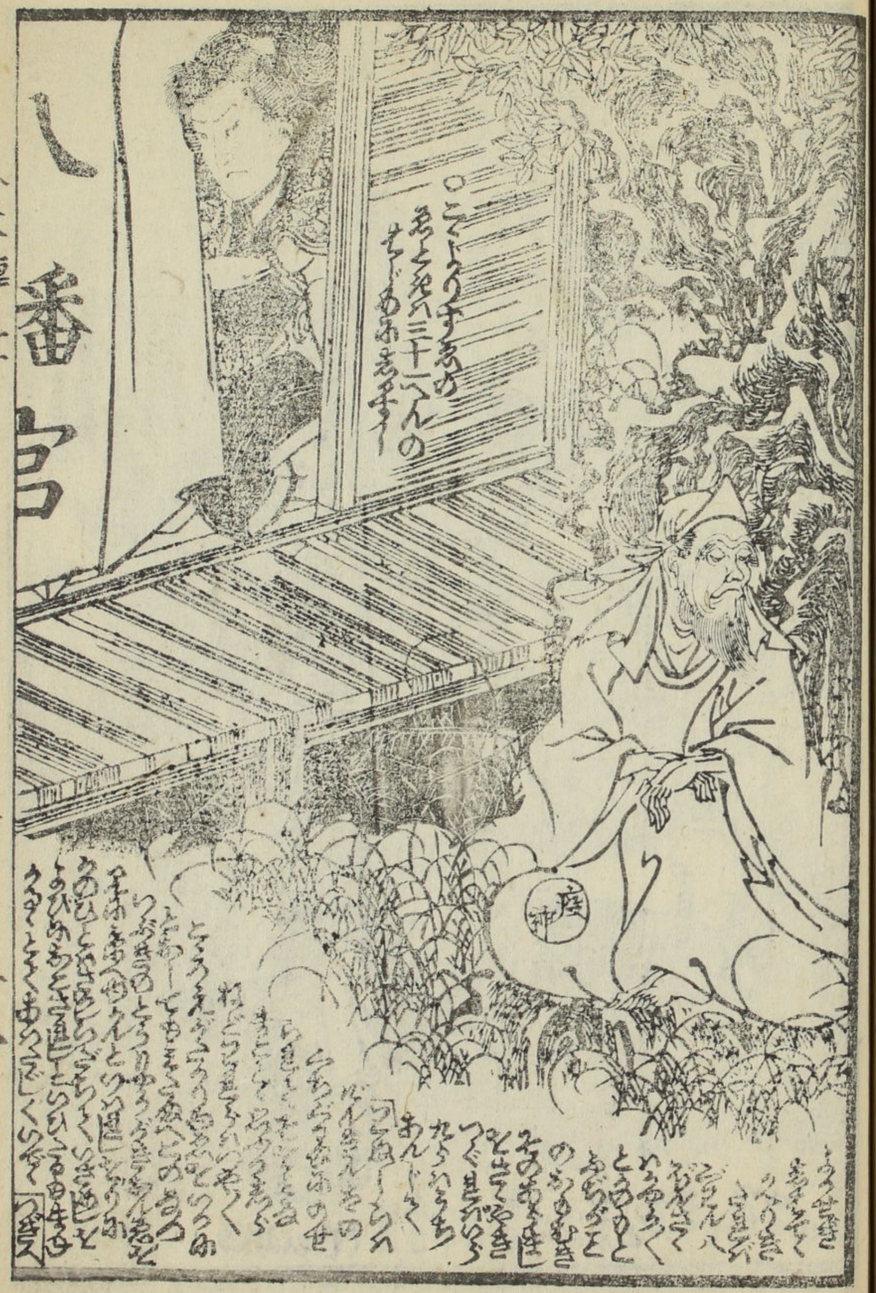
三
上の巻
つゞき


素

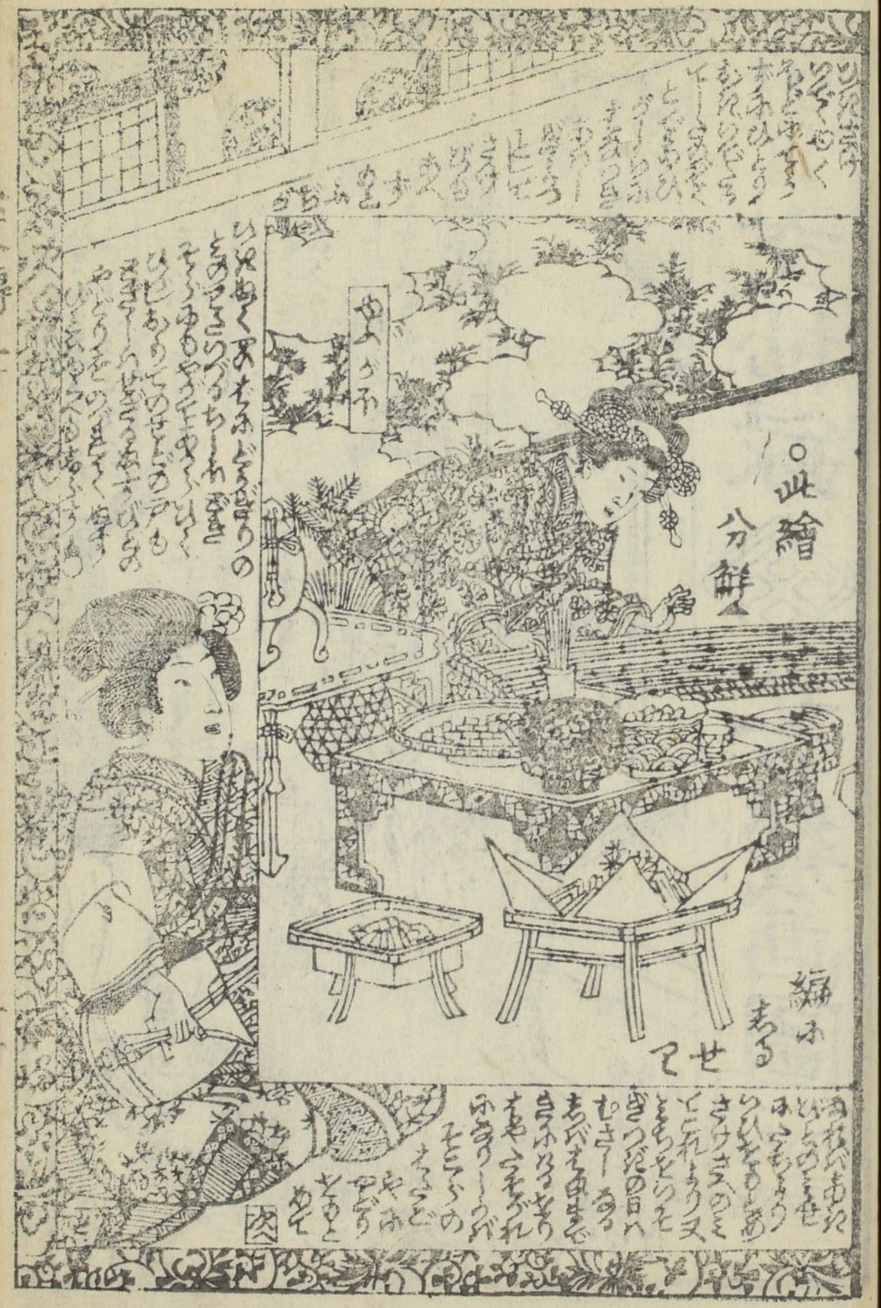
八犬傳三十
十三

四
三の巻
林示 菓酒山門入

壬面


八番宮
庚申

あさがれ
三十一


八分鮮
ゆうかほ

魯文抄録

芳幾画圖

舶来品仏酔店

原書い唐山施耐庵飜案ハ皇國乃著作堂天剛地
数の星ち員百と除きそ八算の数ゆ換ゑる十露盤玉
二轉作二品乃一種生得水滸ち請賣を又取次の
八犬傳因む刄題ゆ讀と謂假名とゆ名を賣物の
名聞名利蠅頭微利諸絶の高價ゆひ死ゆく鼻肌
低き見職の直段ハちれと文人商人雷門の定店飛ゆ
跋ゆ変ッと轉宅告條めして序をるにゆん

涅槃迦堂の
いろは長家ゆ

假名垣魯文戯誌

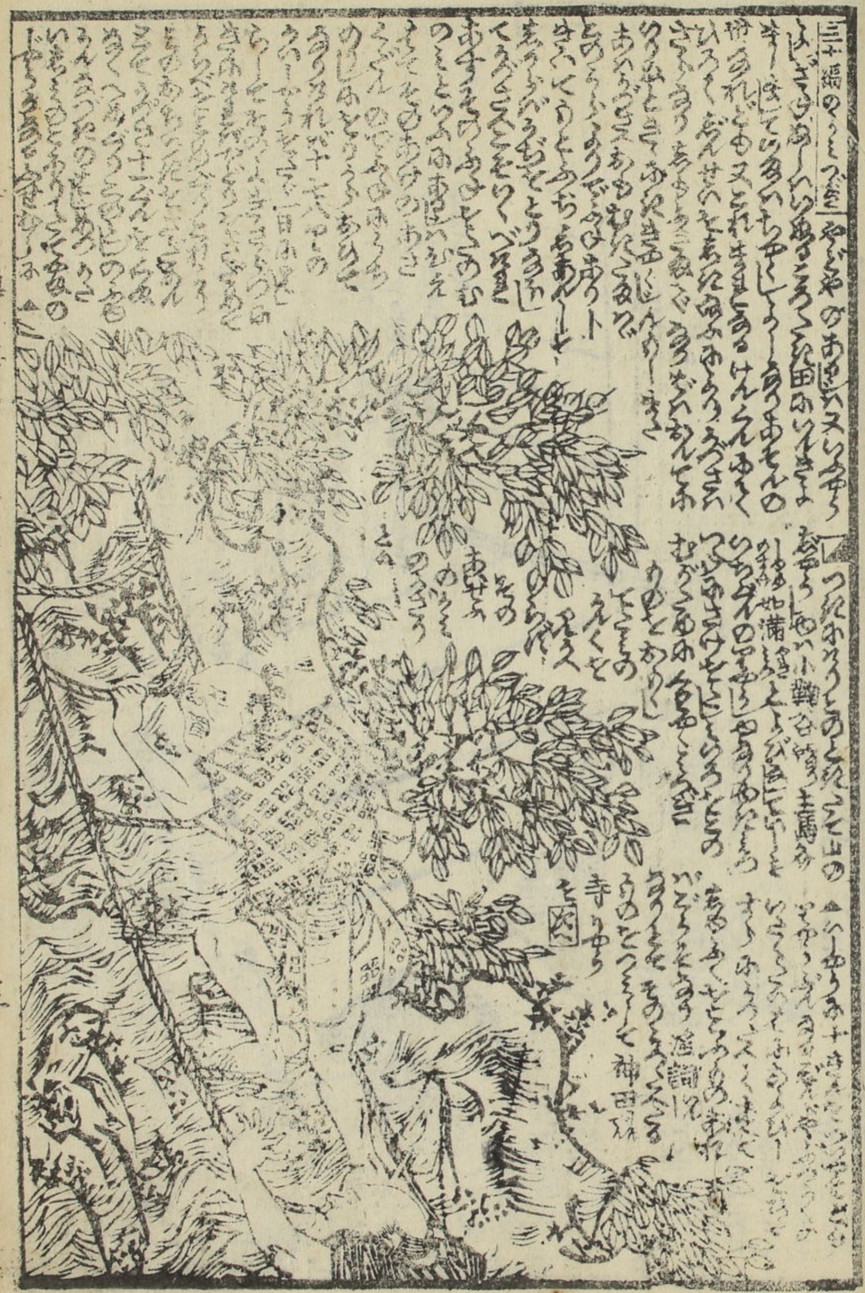
本翰舶来品仏酔店

○河鯉佐太郎孝嗣

後更政木大江入道

蓮の安右

大江親兵衛
仁
扶桑とうとまる
移る矢うなの
かる門乃寺の

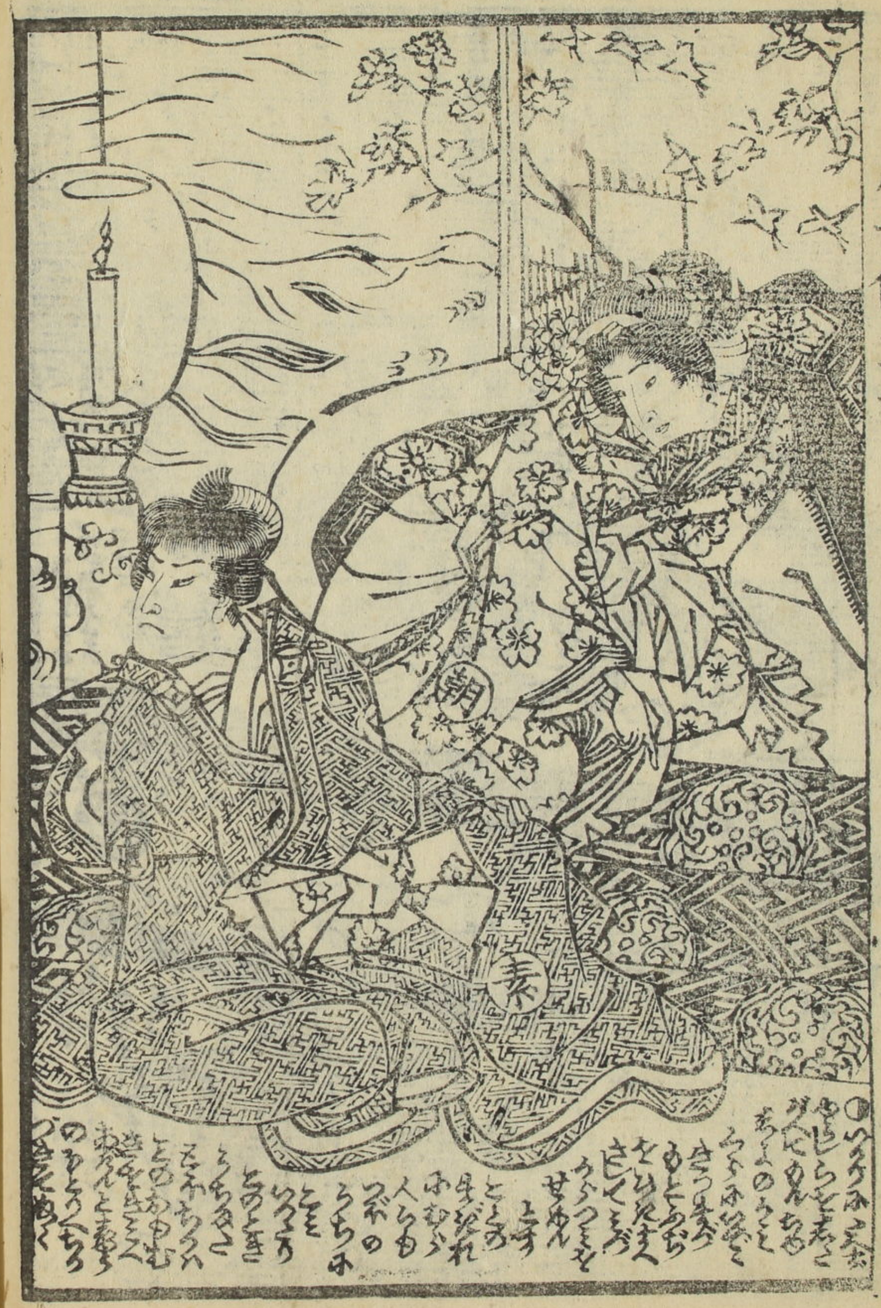


八犬傳三十一
八

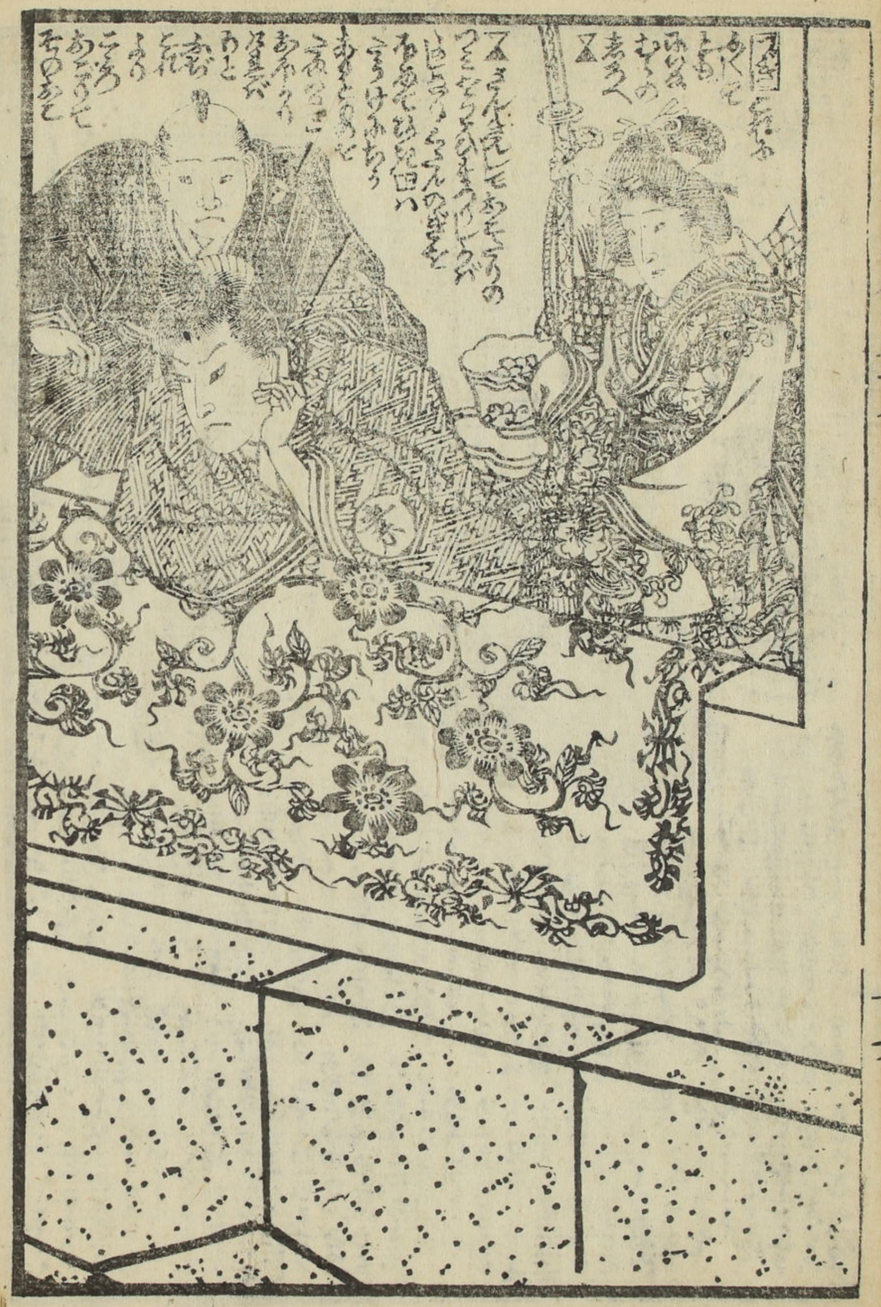
八犬傳三十一
九

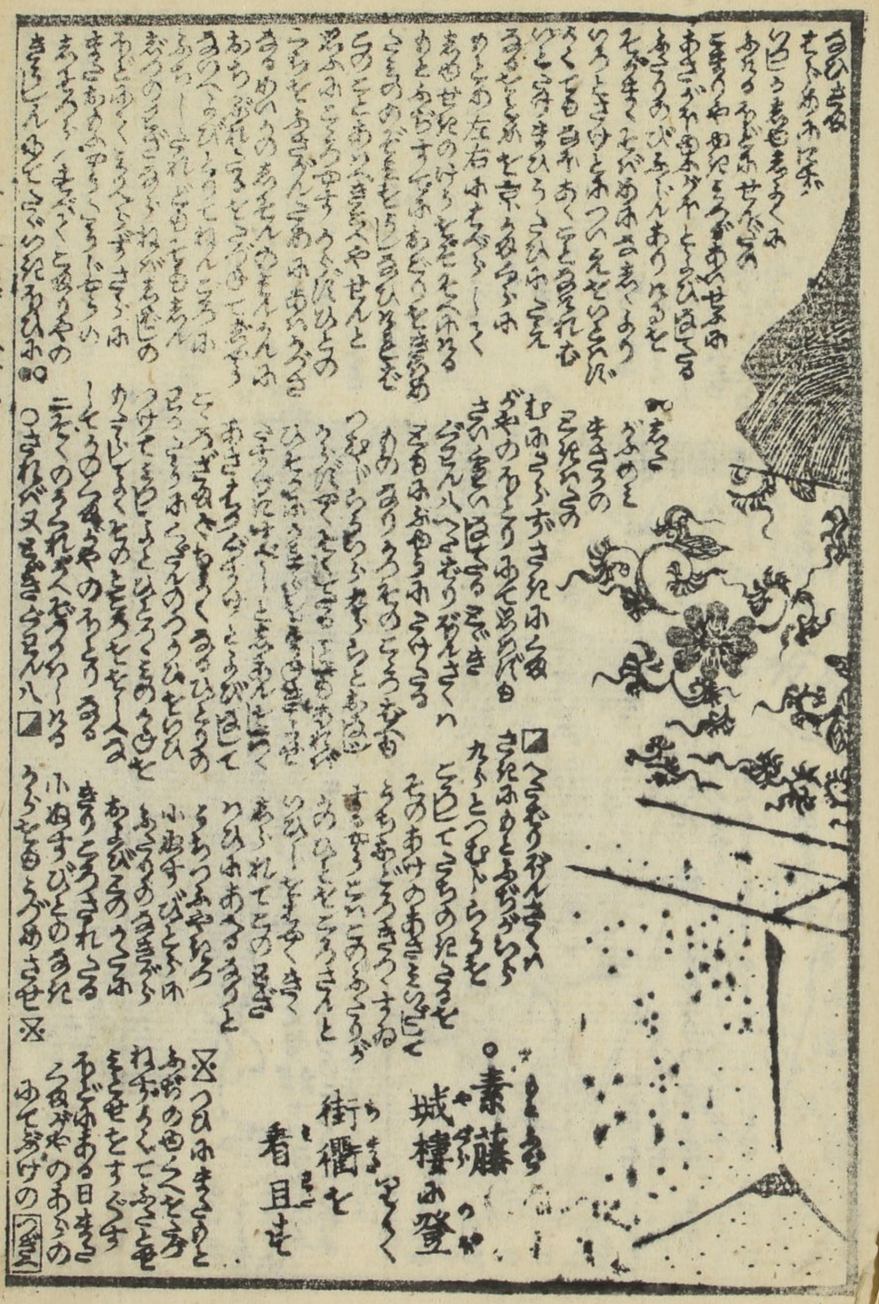
素
本
焼

假名垣魯文録
一恵齋芳幾画



一文斎
幾代画





素藤の城樓を登
街衢を看且せ

八犬傳三十一

八犬傳三十一

假名垣魯文作　朝霞閣樓芳幾画